

## 第 10 章 検討委員会の開催

### 10— 1 検討委員会の開催概要

森林・山村多面的機能発揮対策の取組状況等について、専門的な見地から検討を行い、今後の展開等についての論点の整理や提言を行うことを目的に、有識者 4 名で構成する「平成 29 年度森林・山村多面的機能発揮対策評価検証事業 検討委員会」を設置し、3 回の委員会を開催した。検討委員会の委員構成及び各回の開催概要を以下に示す。

表 10.1 森林・山村多面的機能発揮対策評価検証事業 検討委員会 委員一覧

氏名（敬称略）	所属・役職	備考
山本 信次	岩手大学農学部 准教授	委員長
丹羽 健司	特定非営利活動法人地域再生機構 木の駅アドバイザー	委員
原田 明	一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構 業務第 2 部 コミュニティービジネスチーム長	
森本 淳子	北海道大学 大学院 農学研究院 准教授	

〔委託者〕 林野庁 〔事務局〕 公益財団法人 日本生態系協会

表 10.2 検討委員会の開催状況

回数	開催日時	会場	主な検討議題
第 1 回	平成 29 年 9 月 22 日(金) 13:30～15:30	東京国際フォーラム G603 会議室	①事業概要 ②モニタリング調査の補足調査について ③モニタリング・ガイドラインの改訂について ④交付金の手引きの見直しについて
第 2 回	平成 29 年 12 月 11 日(月) 13:30～15:30	東京国際フォーラム G503 会議室	①アンケート結果速報について ②モニタリング・ガイドラインの改訂について ③モニタリング調査以外での本交付金の効果の確認方法について
第 3 回	平成 30 年 2 月 27 日(火) 13:30～15:30	東京国際フォーラム G609 会議室	①市町村アンケート調査等概要報告 ②モニタリング・ガイドラインの改訂について ③モニタリング調査のパンフレットの作成について ④モニタリング調査以外での本交付金の効果の確認方法について ⑤平成 31 年度以降の本発揮対策についての提言について

## 10-2 検討委員会での主な議論

### (1) 第1回検討委員会（平成29年9月22日）での意見等

検討議題	主な意見等
開会あいさつ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ モニタリング調査の導入に伴い、昨年の検討委員会で懸念していた事態が発生しており、マニュアルの数値目標が絶対化して、それを目標に、目的にということになっている。</li> </ul>
モニタリング・ガイドラインの改訂について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 調査が全国一律であるのはよいが、施業は多様でよい。その作業が良いか悪いかという判断は全国的なガイドラインでは無理だろう。</li> <li>・ 独自の調査については細かく制限をするのではなく「説明できるのであれば良い」というような流れになっていった方が、楽で、豊かな良いものが出てくるのではないか。</li> <li>・ 多面的機能は、森林が適切に管理された状態で初めて発揮される。森林の状態が悪い場合は当然改善が求められるが、撤退をしないという判断をしたところには何か維持するための活動が当然行われるべきであり、それを評価するべきではないか。</li> <li>・ 標準化に馴染まないものはあることは認め、標準化に馴染まないものについては、明らかに不適切でない限りは OK にできるような方向で見なければよい。</li> <li>・ この事業を何のためにやっているのかと言えば、多面的な機能を発揮させるためである。正しくないか正しいか解らないなりに、山での活動に参加していなかった人たちが山に向き合う機会を作ることが大切である。</li> <li>・ 正しさというのは、本当にいろいろな種類があって一律には決められない。そこで直接その森に関わっていこうとする人たちの意見がある程度優先されるべきである。</li> </ul>
交付金の手引きの見直しについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保険に関する部分については、様々な条件があるため、自分たちの活動に適切なものを選ぶことができるように示さないと活動組織は分からなくなる。</li> <li>・ Q&amp;A については、同じようなことが重複して出てくるところがある。少しの違いが別の意味で捉えられてしまうところもあるので、重複を回避することも必要である。</li> </ul>

(2) 第2回検討委員会(平成29年12月11日)での意見等

検討議題	主な意見等
アンケート 結果速報に ついて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事業評価レベルで、活動資金が確保できないとしても、人材がいないと評価するのは適切ではない。</li> <li>・ 大きな問題としては、「モニタリングが難しい」というのが一つ。二つ目は、上乗せ支援で自治体との連携が義務付けられたが、自治体がお金を出すことができず難しいという話がある。</li> </ul>
モニタリン グ・ガイド ラインの改 訂について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実施要領とモニタリング調査の流れとの整合性を取っていくと、かなり複雑になるのは目に見えている。きちんと整合性を取れるようであれば、取って示さないとかえって現場が混乱する。</li> <li>・ 樹高については、伐採するところで非常に正確な実測値が出る。</li> <li>・ 調査区設定は、小さい面積の場合は、普通の実測により斜距離で行う。100m×100mくらいのプロットを設定する時は水平距離を取る。ただし、現場で水平で取るのは難しいのではないかと。傾斜が大きいと話が変わるが、斜距離でも水平でも誤差は小さいと思われる。</li> <li>・ 今回の狙いはやはり、数値化するということは絶対に行う。しかし、ノルマではないことを示す。活動組織に地域のデザイン、山のデザインをするという認識を持たせることで十分だと思う。</li> <li>・ 調査について、エクセルで野帳を用意した方がよい。</li> <li>・ 植生調査には開花個体数も入れたほうが良い</li> <li>・ 広葉樹が生えていれば良いというのであれば、ササさえ侵入しなければ広葉樹になる。</li> <li>・ 広葉樹であれば何でも良いのかという議論がある。本来戻ってきてほしい樹種ではなく、異なる樹種しか出てこないケースもある。</li> <li>・ 地域によって、その地域の住民らが心地よい山づくりや景観が何かというのは様々である。</li> </ul>
モニタリン グ調査以外 での本交付 金の効果の 確認方法に ついて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 施業の効果だけでなく、重要であるのは、山に向き合う人の数を増やすことである。それをきちんと評価されるような工夫がほしい。</li> <li>・ モニタリングだけでは把握しきれない効果を把握することは賛成。評価検証事業を通じて把握する形にできればよい。</li> <li>・ もし活動主体者側のことを考えるのであれば、自由回答で、こういう効果があったということを上げさせる方が、達成感があって良いのではないかと。</li> <li>・ 一回試行段階としてやってみて、中身を見ながら改善していくということではよいのではないかと。</li> </ul>

(3) 第3回検討委員会(平成29年2月27日)での意見等

検討議題	主な意見等
市町村アンケート調査等概要報告	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ おおむね市町村の反応が、好意的なものが多い。</li> <li>・ 市町村の現役の方が事務処理などを積極的にサポートしているのはすごいことだと思う。</li> </ul>
モニタリング・ガイドラインの改訂について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大枠で考えると、①数値化すること、②目標林型を持つこと、③必ず達成しなければならないようなノルマではないこと、という3点を押さえておかねばならない。</li> <li>・ 広葉樹天然林の林床の照度の確保ということであれば、今の胸高断面積の積算から比率を決めて伐採するというので良い。</li> <li>・ 提案を集めていくことを強調すべきである。みんなで試行錯誤して、その結果を教え合ったら、すごく良い手法ができるかもしれない。</li> <li>・ アドバイザリーボードまでいなくても事例を集める場があってもよいかもしれない。</li> <li>・ 全国の事例を集めて、蓄積し、知りたいことに対して何をすればよいのかが見えてくれば良い。ネットで公開できる事例集を今後作っていけば、迷っている人たちに対して何らかの質問に答えられる。</li> <li>・ 地域ごとに大分違っている。全国レベルで統一感を出すよりは、地域ごとの統一感があるレベルで良いのではないかな。</li> <li>・ 現在のガイドライン案では、3か所、4か所みないと、初回調査なり数値目標なりの概念が理解できない。逆に現場の人たちからすると、どこか1ページを見て、その概念を誤解してしまうことも考えられる。一つにまとめてしまった方が良いのではないかな。</li> </ul>
平成31年度以降の本発揮対策についての提言について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 写真についての要望が多い。人件費を取らないところについては、多くの写真はいらないのではないかな。</li> <li>・ 活動組織が、活動内容を文字で表現しきれないケースがある場合には、活動内容を理解するために写真の生データをもらっておいた方が良いケースもある。</li> <li>・ 提言の中に、地域知や素人力を寄せ集めて、この交付金での活動で、新しい林学のようなものが出来つつあることは言っても良いと思う。交付金を始めて5年間の中で、素人でもできる、地域も変わる、森も変わる、新しいステージになってきたことを強調して言っていよう。</li> <li>・ 地域における人と森林の関係の回復に大きく寄与する事業であるということ言うべきである。</li> </ul>